

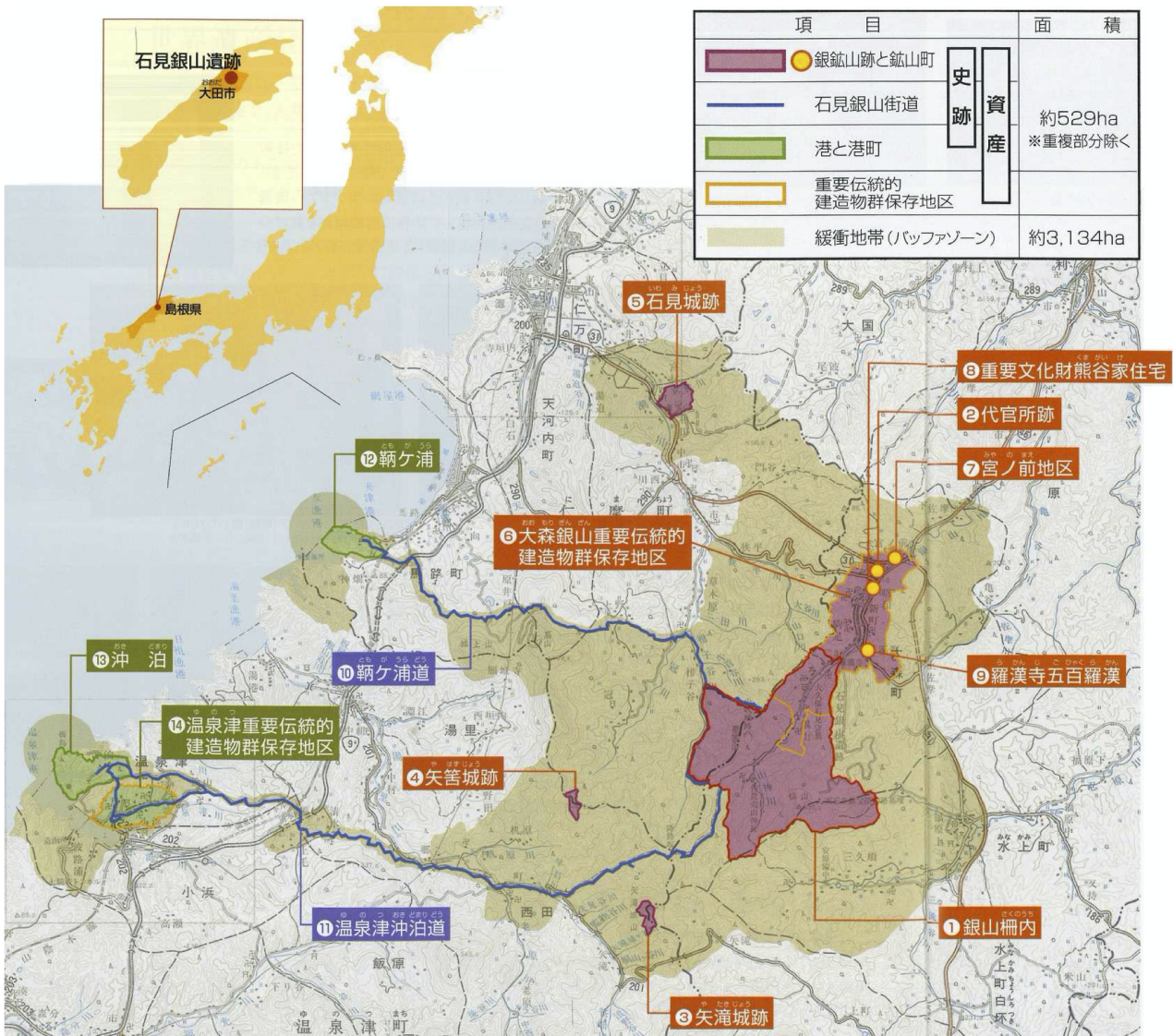
石見銀山遺跡とその文化的景観【寄藤 昂】

【構成資産】

登録資産は、東アジアの東辺に当たる日本列島の本州の西部、日本海に面する島根県のほぼ中央に位置し、石見銀山の採掘・精錬から運搬・積出しに至る鉱山開発の総体を表す「銀鉱山跡と鉱山町」、「港と港町」、及びこれらを結ぶ「街道」の3つの分野に及ぶ14の構成資産から成る。

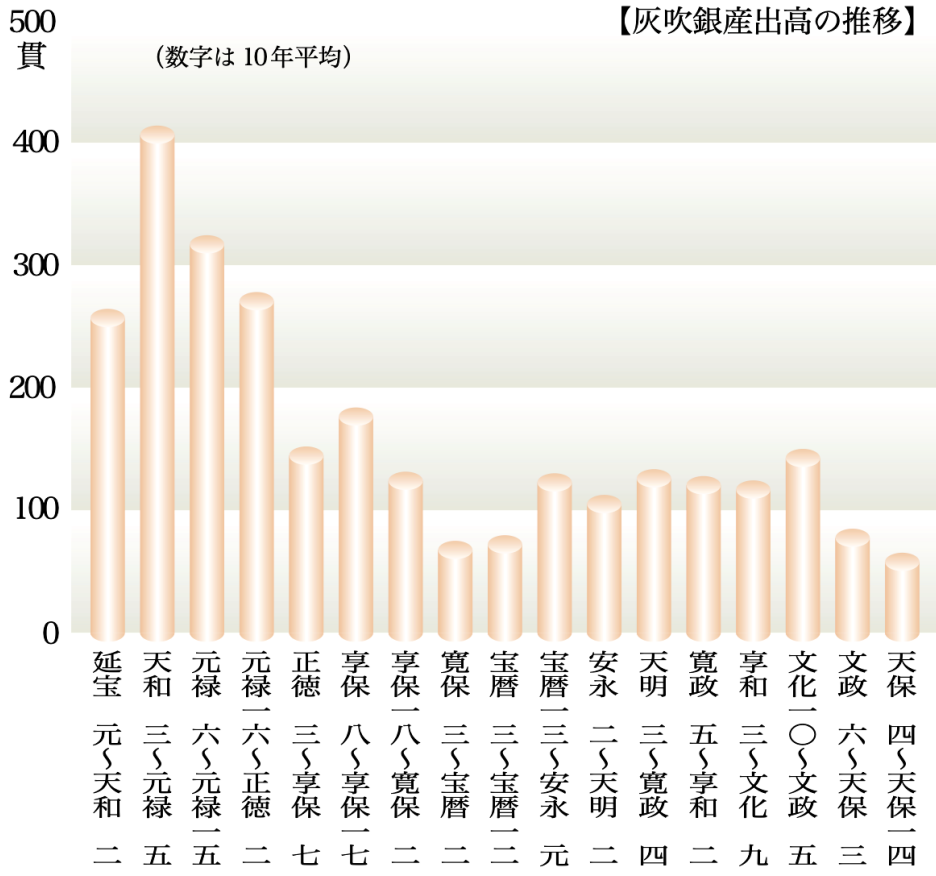
現行の行政区分では14の構成資産は島根県大田市に含まれる。

- 1 銀鉱山跡と鉱山町（銀生産が行われた鉱山と鉱山町）
 - A 銀山柵内 B 代官所跡 C 矢瀧城跡
 - D 矢筈城跡 E 石見城跡 F 大森・銀山
 - G 宮ノ前 H 熊谷家住宅 I 羅漢寺五百羅漢
- 2 街道（鉱山と港をつなぐ銀と物資輸送のための二つのルート）
 - A 石見銀山街道 鞆ヶ浦道 B 石見銀山街道 温泉津・沖泊道
- 3 港と港町（銀の積出しと物資搬入にかかる港と港町）
 - A 鞆ヶ浦 B 沖泊 C 温泉津



年表

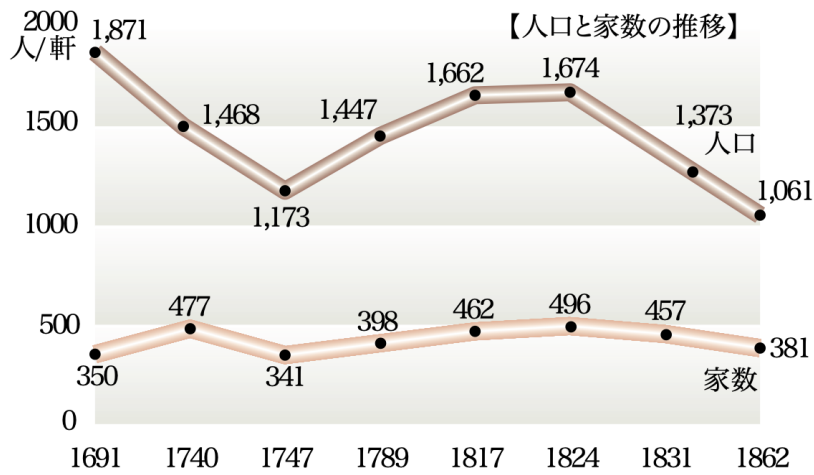
時代	西暦	年号	主な出来事
鎌倉	1309年	延慶2年	初めて石見銀山が発見されたという（「銀山旧記」）
南北朝	1334～1338年	建武・延元	足利直冬、露頭銀を採りつくすという（「銀山旧記」）
室町戦国	1527年	大永7年	博多の商人・神屋寿禎、石見銀山を発見、採掘を始める。この頃は内内氏が支配
	1527年	大永7年	この頃はその場で製錬するのではなく、博多あるいは朝鮮半島に送っていた
	1533年	天文2年	寿禎は、宗丹・慶寿という2人の禅門を博多より招いて、灰吹法という銀精錬技術を導入
	1533年	天文2年	灰吹法による銀精錬開始、以後国内の他鉱山に広まる。この頃大内氏への献納銀は100枚
	1539年	天文8年	この頃には大内氏に納められる銀が500枚と大幅に増加
	1543年	天文12年	鉄砲伝来
	1549年	天文18年	キリスト教伝来
	1549年	天文18年	この頃から安価な日本銀を求めて中国やポルトガルなどの外国船が日本の沿岸に
	1556～1562年	弘治2～永禄5年	毛利氏と尼子氏が互いに銀山の争奪戦を展開する
	1562年	永禄5年	毛利氏、石見銀山支配を本格化させる（～慶長5年）
	1568年	永禄11年	ポルトガル／ドランドの日本図に「銀鉱山王国」と記載あり
安土桃山	1592～1600年	文禄・慶長	毛利氏、1年間に1万枚の銀を上納させる（後、上納銀は年間3万枚まで増加）
江戸	1600年	慶長5年	関ヶ原の戦い
	1600年	慶長5年～	徳川家康、石見銀山をはじめ、佐渡、生野、伊豆、半田など貨幣鑄造に直結する鉱山を直轄地に
	1601年	慶長6年	大久保長安、初代石見銀山奉行となる（延宝3年～代官支配へ転換）
	1602年	慶長7年	年産4千貫＝15トンの銀を産出する。この年、大久保長安が大森町の普請を指示
	1603年	慶長8年	安原備中、年3600貫＝13.5トンの運上を納め、家康に謁見（「銀山旧記」）
	1624年	寛永元年	銀山全体の銀産出量が減少し始める（年間2200貫＝8.2トンを納めた）
	1624～1644年	寛永	この頃までに銀山町から大森町へ陣屋移転
	1641年	寛永18年	奉行・杉田九郎兵衛、銀山境界の木柵を垣松に改める
	1673～1682年	延宝元～天和2年	銀産出量がさらに減少する（10年間の平均産出高261貫＝980キロ）
	1675～1682年		柘植伝兵衛以降は代官支配へと移行
	1733年	享保18年	代官・井戸平左衛門がさつまいもの植え付けを奨励
	1753年	宝暦3年	大森町に幕領の中間支配を担う郷宿が整備される
	1766年	明和3年	石窟五百羅漢が25年の歳月を経て完成し、羅漢寺が創建される
	1800年	寛政12年	大森大火により町の大半が焼失。翌年、熊谷家住宅が再建される
	1815年	文化12年	大森代官所門長屋再建
1866年	慶応2年	長州藩、石見国を占領して大森陣屋に入る	
明治	1869年	明治2年	大森県が置かれる（8月から明治3年1月まで）
	1872年	明治5年	浜田地震により坑道崩落などの被害を受ける。五百羅漢の石窟も一部崩落
	1886年	明治19年	大阪・藤田組が「藤田組大森鉱山」を設立。翌年、経営開始



(江面竜雄「石見銀山」より)

延宝元年は1673年

天保14年は1843年



1691年は元禄4年

1862年は文久2年

金貨

8~11世紀
 国内の銀の産出は少ない
 律令国家による銭貨の発行
 川など地表面から採れた砂金や自然金（川金・柴金）の利用

無文銀銭
 和同開珎銀銭
 開基勝宝

12~15世紀
 銅銭（渡来銭）の使用

16世紀
 戦国大名による金銀山の開発
 領国貨幣（甲州金・石州銀）
 徳川氏による金銀山の直轄化

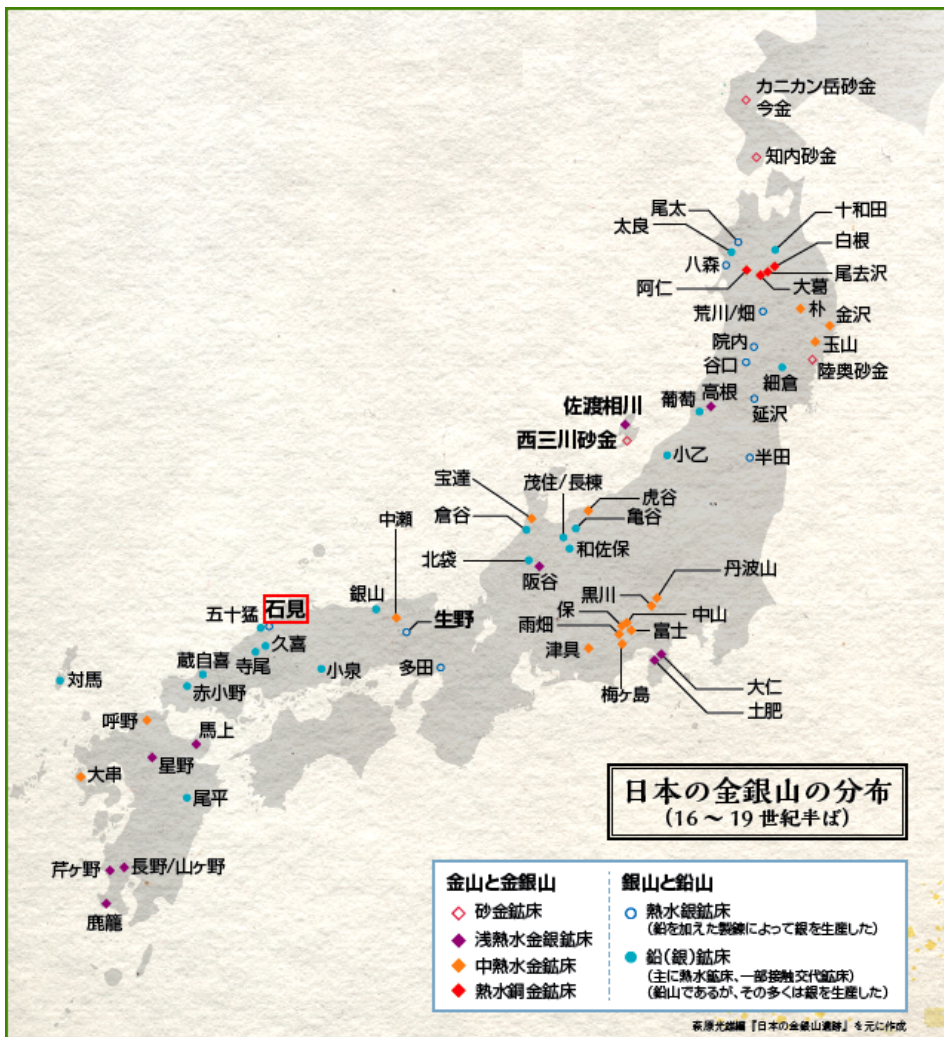
石見銀山の開発をきっかけに
 鉱石から金銀を採り出す技術が向上

判状の金貨
 鉾石から採り出した金（山金）を利用

墨書のある金貨
 重さや額面・品位が統一された金貨

17世紀
 重さをはかって使う銀貨（秤量銀貨）
 家康・江戸幕府による統一貨幣

銀貨
 慶長銀（丁銀・豆板銀）
 慶長金（大判・小判・一分金）



海外貿易と「銀」

- 1530年代～ 石見銀山の本格的な開発で銀が増産され、朝鮮王国との交易手段として大量に用いられる。
- 1540～49年 中国の福建・広東・浙江省方面の船が日本へ来航するようになり、日本銀が流出。
- 1549年 イエズス会のフランシスコ・ザビエルが上陸、キリスト教を布教。
- 1561年 バルトロメオ・ヴェリユ「世界図」上の日本の本州部分に銀鉱山が2ヶ所記載される。
- 1581年 スペインに反乱起こしたオランダが独立宣言
- 1568年 フェルナン・ファズ・ドラード「日本図」上の石見付近に銀鉱山王国と記載される。
- 1595年 ルイス・ティセラ「日本図」上の石見付近に銀鉱山と記載される。
- 1600年 オランダ船フリーデ号が豊後国臼杵（現大分県臼杵市）の海岸に漂着
ヤン・ヨーステン、ウィリアム・アダムス（英人）らが上陸、家康に召抱えられる。
- 1602年 オランダ東インド会社設立。
- 1600年代初頭 日本の朱印船が東南アジア海域の交易で活躍。
- 1609年 オランダ東インド会社の船が平戸に到着、家康を表敬して朱印状を得る。
- 1609年 オランダ東インド会社が平戸にオランダ商館を設立。
- 1639 鎖国の完成。以降19世期半ばまで日本は中国・オランダとのみ貿易。
主な輸入品は中国産の生糸、絹織物、砂糖、香木、胡椒、鮫皮、薬品など。
輸出品は初期には「銀」（1868年以降は禁止）、「金・おもに小判」（1763年禁止）
その後は「銅・棹銅」が主体、陶磁器、漆器などの工芸品もあった。
加工された棹銅は輸出品として最も重要で、おもに大坂で精錬されていた。

